

意見の相違は どこからくるか

—トレースらの同志に答える—

外文出版社

北京

意見の相違はどこからくるか

——トレーズらの同志に答える——

外文出版社

北京

意見の相違はどこからくるか

——トレーズらの同志に答える——

(一九六三年二月二十七日付「人民日報」社説)

いま、中国共産党その他の兄弟党を攻撃し、国際共産主義運動の団結を破壊している逆流のなかで、フランス共産党書記長トレーズ同志とフランス共産党の一部の同志はきわだつた役割をはたしている。

一九六二年十一月下旬くらい、トレーズらの同志は中国共産党その他の兄弟党を攻撃する大量の言論をどつと発表したほか、多くの党内文書を公表した。そのうち、おもなものはつぎのとおりである。

一九六二年十二月十四日、トレーズがフランス共産党中央委員会総会でおこなつた演説、

一九六二年十二月十四日、フランス共産党中央委員会政治局員ギョーがフランス共産党中央委員会総会でおこなつた、国際情勢と国際共産主義運動、労働運動の団結問題にかんする状況報

一九六二年十二月十四日、フランス共産党中央委員会総会で採択された、国際情勢と国際共産主義運動、労働運動の団結問題にかんする決議、

一九六三年一月九日、ギョーがフランス共産党中央委員会機関紙「ユマニテ」のために執筆した社説、

同日、フランス共産党中央委員会機関誌「フランス・ヌヴェル」週刊誌に発表された「戦争平和および教条主義」と題する論文、

一九六三年一月五日から十六日まで、「ユマニテ」に連載された、中国共産党を名ざして攻撃した一〇編の論文、

一九六三年一月十六日、「フランス・ヌヴェル」に発表された「われわれはどのような時代に生きているか」と題する論文、

一九六三年一月、フランス共産党中央委員会から出版された「国際共産主義運動の諸問題」というパンフレット（このパンフには、ここ三年ふいフランス共産党の一部の指導者が中国共産党を攻撃した一五編の文書が収録されており、そのなかにはトレーズが一九六〇年十一月に兄弟党のモスクワ会議でおこなった発言と、その彼がフランス共産党中央委員会総会でおこなったこの兄弟党の会議についての報告がふくまれている）、

一九六三年二月十五日、「ユマニテ」に掲載されたギョーの論文。

中国共産党を攻撃したこれらの言論の主な内容は、すでに二月二十四日付の本紙に発表した。これらの言論を見ても、トレーズらの同志が最近の反中国大合唱、中国共産党を攻撃する競争にたくべつ力をいれており、われわれを攻撃する他の兄弟党の多くの同志をしのいでいることがわかる。

トレーズらの同志は、中国共産党を攻撃するほか、アルバニア労働党に悪どい攻撃をくわえ、朝鮮、ビルマ、マラヤ、タイ、インドネシア、ベトナム、日本などの兄弟党を非難し、さらにいま帝国主義と植民地主義にたいして果敢な闘いをすすめている民族解放運動までも攻撃した。彼らは、中国共産党のとっている「セクト主義と冒険主義」の立場なるものが「とりわけアジアの一部の共産党と一部の民族主義運動の内部で若干の反響をえており」、「これらの党と運動のなかどきに存在する『極左』主義を助長した」などと中傷している。フランス共産党の一部の同志が被抑圧民族の革命事業にたいしてとっているこのような態度には、まことに驚かざるをえない。彼らは国際共産主義運動の団結を破壊する面で、あまりにも遠くまで歩みすぎた。

兄弟党のあいだの意見の相違はモスクワ宣言とモスクワ声明の原則にもとづき、じぶんたちの陣列のなかで平等な同志的な討議と話し合いを十分につくして解決をもとめなければならぬ

し、また、そうすべきである——中国共産党は早くからそう考えており、いまもなおそう考えている。われわれはいかなる兄弟党にたいしてもさきんじて公然たる批判をおこしたことはないし、さきんじて公然たる論争をいどんだこともない。だが、団結して敵にあたるという利益に重きをおくわれわれのこの正しい立場につけこみ、中国共産党を公然と勝手きままに攻撃しても、しかるべき反撃をうけないだろうなどと考えるものがあるなら、それはとんでもない思いちがいである。

われわれは、中国共産党その他の兄弟党をさかんに攻撃している同志たちに告げたいと思う。兄弟党の関係は平等である、諸君はすでに公然と中国共産党にはいままな攻撃をくわえている以上、われわれに公然たる回答をしないよう要求する権利はないのである。同様にまた、諸君がすでに公然とアルバニア労働党に悪どい攻撃をくわえている以上、アルバニアの同志は諸君に公然たる回答をあたえる平等の権利を完全にもつているのである。いま、一部の兄弟党の同志は、一方では公然たる論戦をやめようといひながら、他方ではひきつづき中国共産党その他の兄弟党に攻撃をくわえている。このような二面的な態度は、実際には、諸君が他人を攻撃するのを許すだけで他人が諸君の攻撃に回答するのを許さないものである。これは絶対にできない相談である。中国の古いことばに、「礼は往來をたつとぶ、來たりて往かざるは礼にあらざるなり」とい

うがある。いま中国共産党を攻撃しているひとにたいしては、この点についてねんごろに注意をうながす必要があると思う。

トレーズらの同志は中国共産党を攻撃するにあたって、われわれの時代の性質、帝国主義にたいする見方、戦争と平和、平和共存、平和移行などの問題にふれた。ところが、仔細に見ればだれでもわかるように、彼らはただ他人がつとにのべた論点をくりかえしているにすぎない。これらの問題をめぐる彼らのまちがった論点にたいしては、本紙社説「万国のプロレタリアは団結してわれわれの共同の敵に反対しよう」、「トリアッチ同志とわれわれとの意見の相違」、「モスクワ宣言とモスクワ声明の基礎の上に団結しよう」と、『紅旗』社説「レーニン主義と現代修正主義」という四つの論文のなかですでに回答してあるから、ここでふたたび討議をくりかえす必要はない。

指摘しなければならないのは、トレーズらの同志がその演説、報告、論文のなかで、事実をまげ、是非を転倒させ、人びとの耳目をまよわせることに多くの紙幅をさいて、国際共産主義運動の団結を破壊し、分裂をつくりだした責任を中国共産党におしつけようとたくらんでいることである。彼らは、国際共産主義運動における意見の相違は「とくに中国の同志たちがつくりあげたもので」、「この意見の相違は中国の同志が「ソ連共産党第二十回大会の論点をまだ実質的にうけ

「いれていない」ところから生じたものだ、と言いちらしている。彼らはまた、第一回と第二回の兄弟党モスクワ会議から日がたてばたつほど、中国の同志の立場は「彼らじしんが同意し、賛成投票もした論点からますます遠く離れてしまう」などといっている。

トレーズらの同志が国際共産主義運動に生じた意見の相違についての責任の問題をとりあげた以上、われわれもまたこの問題について論じることしよう。

国際共産主義運動における意見の相違はいったどこから生じたのか？

トレーズらの同志が説くところによると、国際共産主義運動における意見の相違は中国共産党がソ連共産党第二十回大会の論点をうけいれなかつたためにうまれたのだという。トレーズらの同志のこうした論法じしん、モスクワ宣言とモスクワ声明に定めてある兄弟党の關係についての準則にそむいている。この二つの共同の文書によれば、兄弟党の相互關係は平等であり、独立である。誰もある党の論点をすべての兄弟党にうけいれるよう要求する権利はない。いかなる党のいかなる大会の決議も、国際共産主義運動の共同の路線にすることはできず、他の兄弟党にたいして拘束力をもたない。トレーズらの同志があまんにて他のある党の論点と決議をうけいれたのなら、それは彼ら自身のことからである。中国共産党についていえば、われわれとすべての兄弟党にたいして拘束力をもつ共同行動の準則はマルクス・レーニン主義だけであり、兄弟党

が一致してとりきめた共同の文書だけであつて、いかなる兄弟党の大会の決議でもなく、他のいかなるものでもない、われわれは一貫してそう考えている。

ソ連共産党第二十回大会については、積極的な側面もあれば、消極的な側面もある。その積極的な側面にたいしては、われわれは支持すると表明した。その消極的な側面、つまり、国際共産主義運動にかんする一部の重大な原則問題における誤った観点にたいしては、われわれは一貫してちがった意見をもっている。われわれは中ソ両党の会談でも、兄弟党の会議でも、かつてじぶんの観点をかくしたことはなく、いくどもはつきりとわれわれの意見を申しのべてきた。だが、国際共産主義運動の利益のために、われわれはいまだかつてこの問題を公然と討議したことがなく、ここでもこの問題を討議しようと考えてはいない。

事実がはつきりしているように、ここ数年らい国際共産主義運動の意見の相違がうまれたのは、ひとえにある兄弟党の同志たちが各国共産党、労働者党の一致してとりきめたモスクワ宣言にそむいたからである。

周知のとおり、一九五七年の各国共産党・労働者党モスクワ会議は、マルクス・レーニン主義の基礎のうえに立ち、同志的な話しあいと集団的な努力をつうじて、兄弟党のあいだにある一部の見解の相違をとりぞぎ、国際共産主義運動の当面の重大問題についての意見を一致させて、

モスクワ宣言をさだめた。この宣言は国際共産主義運動の共同綱領である。すべての兄弟党はこの綱領をうけいれると宣言した。

すべての兄弟党が実践のなかでこの宣言を厳格にまもり、これにそむきさえしなければ、国際共産主義運動の団結はつよまり、われわれの共同闘争は発展するだろう。

一九五七年のモスクワ会議以後ある期間は、共同の敵に反対する闘争、なによりもまずアメリカ帝国主義に反対する闘争のなかで、またマルクス・レーニン主義の叛徒ユーゴスラビアの修正主義者に反対する闘争のなかで、各国共産党、労働者党の団結した戦闘はわりに順調にすすみ、成果もあがった。

ところが、ある兄弟党の同志たちがしばしばある党の大会の決議を各国兄弟党の共同綱領であるモスクワ宣言のうえに置こうとしたため、不可避免的に国際共産主義運動の内部に意見の相違が生じた。とりわけ、一九五九年九月のキャンプ・デービッド会談の前後、ある兄弟党の同志たちは国際情勢と国際共産主義運動に関する多くの重大問題について、マルクス・レーニン主義にもとり、モスクワ宣言にそむく一連の誤った観点を発表した。

彼らは、帝国主義が現代戦争の根源であり、「帝国主義が存続するかぎり、侵略戦争の温床はつねにある」というモスクワ宣言の科学的断定にそむいて、帝国主義制度と、人が人を搾取し、

人が人を抑圧する制度がまた世界の大部分の地区に存在する条件のもとでも、「社会生活から最後の、永久的に戦争をとりのぞく現実的な可能性があり」、「兵器もなく、軍隊もなく、戦争もない世界」を実現できる、ということをつたえず宣伝した。当時、彼らはまた、一九六〇年は「兵器と軍隊のない世界、戦争のない世界」という人類の悲願を実現に移す最初の年として史書に書きとめられるだろう」とも予言した。

彼らは、社会主義陣営、民族解放運動、国際労働者階級および各国人民の平和をめざす大衆運動の連合闘争に依拠して世界戦争を防止するというモスクワ宣言の論点にそむき、世界平和をまもる希望を大國の首脳的人物の「賢明さ」によせ、現代の歴史的運命は実際には個々の「大人物」とこれら大人物の「賢明さ」によつて決定されると考え、大國の首脳的人物の会見で歴史の進展を決定し変更することができると考えた。彼らは、「われわれが一再ならずのべたように、もつとも複雑な国際問題を解決しうる能力をもっているのは大きな権力をにぎっている各国政府の首脳だけだ」といつている。彼らはキャンプ・デービッド会談を国際関係のなかの「新段階」、「新紀元」、さらには「人類史の転換点」などといっている。

彼らは、アメリカ帝国主義は「全世界の反動勢力の中心となり、人民大衆のもつとも凶悪な敵となつている」というモスクワ宣言の断定にそむいて、とくにアメリカ帝国主義の首脳的人物ア

イゼンハワーをたたえることに熱中し、彼は「真心から平和を望んでいる」、「ほんとうに『冷戦』の状態をなくすることを望んでいる」、「われわれとおなじように平和を保障することに心をくだしている」などといったている。

彼らは、モスクワ宣言が指摘した二つのことなる社会制度の平和共存にかんするレーニン主義の原則にそむいて、平和共存をたんにイデオロギー闘争と経済競争であると解釈している。彼らは「二つの制度のあいだの不可避的な闘争をただ二つのイデオロギーのあいだの闘争にかえ、平和競争——資本家たちがいつそう理解しやすいことばでいえば——せり合いにかえるよう努力しなければならぬ」といつている。彼らはさらに社会制度のことなる二種類の国家の平和共存を抑圧階級と被抑圧階級、抑圧民族と被抑圧民族の関係にまでもおしひろげ、平和共存は各国が社会主義へすすむ道であるなどいつている。これはまったくマルクス・レーニン主義の階級闘争の観点から遊離するものであり、実際には平和共存に名を借りて、帝国主義反対と各国人民の解放事業支持という政治闘争を抹殺し、国際的な範囲での階級闘争を抹殺するものである。

彼らは、アメリカ帝国主義がやつきになつて「解放された諸国民を新しいかたちの植民地主義につなぎとめようとしている」というモスクワ宣言の論点にそむいて、帝国主義は低開発国の

経済を援助して空前の高まりに達せしめることができると鼓吹し、実際には低開発国を略奪するのが帝国主義の本性であるということを否定している。彼らは、「全面的かつ完全な軍縮はまた、いまのところまた経済が発達しておらず、いつそう発達した国々の援助を必要としている一部の国々をたすけるうえで、まったく新しい条件をつくりだすであろう。大国の軍事支出停止でうかせた資金のごく一部をこれらの国々の援助にまわすだけでも、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの経済発展のためまったく新しい紀元をひらくことができる」といつている。

彼らは、植民地半植民地人民の解放運動と各国労働者階級の革命闘争が現代の世界平和をまもる強大な勢力であるというモスクワ宣言の論点にそむいて、民族解放運動と各国人民の革命闘争を、世界平和をまもる闘争に対立させている。彼らはときに民族解放戦争と人民革命戦争を支持すべきであると説くこともあるが、しかし、また、「いまの条件のもとで勃発した戦争はかならず世界大戦となる」、「ごくちいさな火花も世界大戦をひきおこす可能性がある」とくりかえし強調し、「あらゆる種類の戦争に反対」せねばならぬとくりかえし強調している。これは、実際には正義の戦争と不正義の戦争を区別せず、世界大戦を防ぐことに名を借りて、民族解放戦争と人民革命戦争に反対し、あらゆる正義の戦争に反対することである。

彼らは、資本主義から社会主義への移行には平和的と平和的でない二つの可能性が存在すると

いうモスクワ宣言の論点、「支配階級はけつして自発的に権力を放棄するものではない」というモスクワ宣言の論点にそむいて、平和的移行の「ますます大きな現実的可能性」というものを一面的に強調し、平和的移行は「一連の国家にとつてすでに現実的な前景となつた」などといつて

いる。
 以上のような一連の誤つた論点からは、つぎのような結論しかひき出せない。つまり、帝国主義の本性はすでに変わった、帝国主義に固有の克服しえない各種の矛盾はもはや存在しない、マルクス・レーニン主義はすでに時代おくれとなつた、モスクワ宣言は放棄すべきだなどというものがそれである。

これらの誤つた論点をまきちらしている兄弟党の同志は、どのような口実、どのような「外交辞令」、どのような「融通性」をもちだすにしても、彼らがマルクス・レーニン主義にとり、一九五七年のモスクワ宣言の原則にもとつた事実をおおいかくすことはできず、彼らが国際共産主義運動のなかに意見の相違をうみだした責任をのがれることはできない。

ここ数年らしいの国際共産主義運動における意見の相違は、こうしてひきおこされたのである。それでは、国際共産主義運動内部の意見の相違は、また、どのようにして敵のまえにさらけだされたのか？

1959.9.9

トレゾらの同志が説くところによると、国際共産主義運動の意見の相違が表面化するにいたつた発端は、「中国共産党が一九六〇年の夏、各国語でパンフ『レーニン主義万歳』を出版したことである」といつている。だが、真相ははたしてどうだったのか？

じじつ、兄弟党内部の意見の相違が表面化したのは、一九六〇年の夏ではなく、はやくも一九五九年九月のキャンプ・デービッド会談の直前、具体的にいうと、一九五九年九月九日にはじまつたのである。この日、ある社会主義国は中国側のたびかさなる真相説明と勧告を無視し、まぢかねていたかのように自国の通信社をつうじて中印境界事件にかんする声明を発表した。この声明は理非曲直をとわず、中印辺境の衝突に「遺憾」の意を表したものであつて、実際には中国の正しい立場を非難しているのである。彼らはまた、これを「悲しむべき」ことだとか、「おろかな」ことだとかいつている。ある社会主義国がある資本主義国の武力挑発をうけたとき、他の社会主義国がその武力挑発をおこした反動派を非難しないばかりか、逆に自国の兄弟国を非難するといふようなことは、歴史上まったくはじめてのことである。帝国主義と反動派は、社会主義国のあいだにある意見の相違にすぐ気づき、この誤つた声明を利用して、悪どい離間をすすめた。ブルジョアジーの宣伝機構は、当時、この声明は「中国へむけた外交ロケット」であり、「敵父がわが子をおとなしくしろといましめているような口調だ」ときかんに宣伝したものであつ

た。

キャンブ・デービッド会談いご、一部の同志はのぼせあがつてしまい、中国共産党の対外政策と国内政策にたいしていよいよほしいままに一連の公然たる攻撃をくわえた。彼らはおおつびらに、中国共産党は「武力で資本主義制度の安定性をためそう」としており、「ケンカ好きの軍鶏」のように戦争に熱中している」と中傷した。彼らはまた、中国共産党の社会主義建設の総路線、大躍進、人民公社を攻撃し、中国共産党は国家指導の面で「冒險主義」の政策をとつていると中傷した。

これらの同志は、長いあいだ、その誤つた観点を宣伝し、中国共産党を攻撃することに熱中して、モスクワ宣言をまったく脳裏から忘れてしまった。国際共産主義運動の内部に混乱が生じ、世界各国人民の帝国主義反対闘争が方向を見うしなう危険にさらされるにいたつたのは、まさにこのためである。トレーズ同志はきつとおぼえておられるだろう、当時、フランス共産党機関紙『ユマニテ』は「ワシントンとモスクワのあいだに共通のことは、平和共存のことが見つかった」、「アメリカに転換がおこつた」とさかんに宣伝したものであった。

このような状況のもとで、モスクワ宣言をまもり、マルクス・レーニン主義をまもり、当面の国際情勢にたいするわれわれの観点を全世界の人民に知らせるため、中国共産党はレーニン生誕

九十周年を記念するにあつて、「レーニン主義万歳」、「偉大なレーニンの道に沿つて前進せよ」、「レーニンの革命の旗の下に団結せよ」という三つの論文を発表した。そのころ、われわれはすでに半年以上もひとから攻撃されてはいたけれども、また、われわれは論文のなかでモスクワ宣言にそむく誤つた論点について論じはしたけれども、しかし、われわれはやはり団結に重きをおいて、闘争のほこ先を帝国主義とユーゴスラビアの修正主義にむけたのであった。

トレーズらの同志は、われわれが「レーニン主義万歳」など三つの論文を発表したことこそ国際共産主義運動の意見の相違が表面化した発端であるといっているが、これはまったく事実とあべこべである。

一九六〇年五月、アメリカのU2型スパイ機がソ連に侵入し、パリの四ヶ国首脳会談が流産したとき、われわれはもともと、かつてキャンブ・デービッド精神なるものをさかんに宣伝していた同志たちがこのなかから教訓をくみとり、兄弟党、兄弟国の団結をつよめ、あいつもにアメリカ帝国主義の侵略政策と戦争政策に反対することを望んでいた。だが、われわれの期待に反して、一九六〇年六月はじめ北京でひらかれた世界労働評議会の会議の席上、一部の兄弟党の同志はあろうことかアイゼンハワー糾弾に賛成しないばかりか、多くの誤つた観点をまきちらし、さらに中国の同志の正しい観点到反対した。とりわけ重大なのは、一九六〇年六月下旬ブカレスト

でおこなわれた兄弟党の会談の席上、あるものが指揮棒をふりまわして、奇襲攻撃の方式をと
り、大挙して中国共産党に包囲攻撃をくわえるにいたつたことである。このようなやり方は、兄
弟党が話しあいでも共通の問題を解決するという原則を無法にもふみにじり、国際共産主義運動に
きわめて悪い先例をひらいたのであつた。

トレーズらの同志は、ブカレスト会談でアルバニア労働党代表が「ソ連共産党に攻撃をくわえ
た」といつている。だが、この会談に参加した同志たちがはつきり知つていふように、この会談
でアルバニアの同志はなにびとをも攻撃しなかつた、ただあくまでも自己の見解を堅持して、指
揮棒にしたがわず、中国にたいする攻撃に同意しなかつただけである。兄弟党の関係を「親子
党」の関係とみなしている一部のもの目から見れば、ちつばけなアルバニアがあえて彼らの指
揮棒にさからつたのは、まことに大胆不敵で、悪逆無道ということになる。これいらい、彼らは
アルバニアの同志をふかくうらみ、さまざまの悪どい手段をつかつてこれを死地に追いやらねば
落ちつかないという執念をいだくにいたつた。

中国共産党を攻撃する一部の同志は、ブカレスト会談いで、待ちかねていたかのように一連の
重大な措置をとつて、経済的、政治的な圧力をくわえ、ついには国際慣例を無視し、信義にそむ
いて、兄弟国間の協定と契約を一方的に破棄してしまつた。このような協定と契約は、いくつ、

あるはいく十というようなものではなく、いく百にもたつする。思想上のくいちがいを国家関
係にまで拡大した彼らのこのような悪どいやり方は、プロレタリア国際主義に完全にそむき、モ
スクワ宣言にさだめられた社会主義兄弟国の関係についての準則に完全にそむくものである。だ
が、これらの同志はしぶんたちのこのような大国ショービニズムの誤りにたいして自己批判をお
こなわないばかりか、逆に中国共産党が「ひとり舞台」、「セクト主義」、「分裂主義」、「民
族共産主義」などの誤りをおかしたと非難している。これをしも共産主義的道徳に合致してい
るといえるだろうか？　トレーズらの同志はこの真相をよく知つてゐる。だが、彼らは政治
上、思想上の論争を国家関係の破壊にまでみちびくという誤りを真におかしたものを批判する勇
気がなく、逆に中国の同志が「国家問題を政治上、思想上の問題と混同した」と非難している。
是非をわきまえず、白を黒といいくるめるこうした態度こそ、まことに悲しむべきものである。

以上の事実からもはつきりわかるように、一九五七年のモスクワ会議で国際共産主義運動に
おける意見の相違がはげしくなつたのは、一部の兄弟党の同志が一連の重大問題について、兄弟
党の一致してとりきめた共同の路線にいよいよゆゆしくそむき、兄弟党、兄弟国の相互関係につ
いての準則をいよいよゆゆしくもふみにじつた結果である。

トレーズらの同志が事実を無視し、是非を転倒させるこうしたやり方は、彼が一九六〇年のモ

スクワ会議の真相をまげて、中国共産党は「国際労働運動の路線に賛成せず」、会議に「困難な局面をつくりだした」と攻撃している点にもはつきりとあらわれている。

国際共産主義運動の利益のため、われわれはここでこの兄弟党の内部的な会議の詳しい状況にふれようとは思わない、われわれは適当な時機と適当なばあい真相を説明し、是非をあきらかにするつもりである。だが、指摘しなければならぬのは、中国共産党こそ一九六〇年の世界各
 国共産党・労働者党代表者会議の提唱者だということである。われわれはこの兄弟党会議の開催を促進することにつとめた。会議の期間中、われわれはマルクス・レーニン主義と一九五七年のモスクワ宣言を堅持し、一部の兄弟党の同志の誤った観点に反対するとともに、一部の問題では必要な妥協をした。われわれと他の兄弟党は力をあわせてさまざまな困難を克服し、会議に積極的な成果をおさめさせ、一致したとりきめをむすんで、モスクワ声明を発表した。これらの事実だけでも、トレーズらの同志のでたらめをあばくには十分である。

一九六〇年のモスクワ会議で、各国の兄弟党は一致してとりきめた声明にもとづいて、国際共産主義運動の団結をつよめ、力を集中して、ともに敵にあたるのが理の当然であった。一九六一年一月にひらかれた中国共産党第八期中央委員会第九回総会の各国共産党・労働者党代表者会議にかんする決議は、つぎのように指摘している。△「中国共産党は終始かわらずマルクス・レー

ニン主義とプロレタリア国際主義の原則を堅持しており、一九五七年のモスクワ宣言を擁護しているのと同様、この会議の声明を擁護し、あくまでもこの文書に定められた共同の任務を実現させるために努力奮闘するであろう」と。ここ二年あまりのあいだ、中国共産党はずと国際共産主義運動の共同のとりきめを忠実に実行し、モスクワ宣言とモスクワ声明の革命的原則をまもるためにたゆみない努力をはらってきた。

だが、トレーズらの同志はあろうことか、中国共産党は一九六〇年のモスクワ会議で、「各党が共同で定めた政策の主な面についてひきつづきちがった意見を表明している」と攻撃し、中国の同志の「立場は運動ぜんたいの利益に有害である」といつている。

一九六〇年のモスクワ会議で、一連の問題についてモスクワ宣言とモスクワ声明にたいしますます重大な違反をしているのはいったい誰であるか？

モスクワ会議後まもなく、ソ連とアルバニアの関係がいちだんと悪化した。トレーズ同志はソ連とアルバニアの関係が悪化した責任を中国共産党の側になすりつけようとくわだてている。彼はこともあろうに、中国は「自己の影響力を利用して、アルバニア労働党の指導者を比較的正しく彼らの義務が理解できるようにみちびく」ことをしなかつたと非難している。

事実はどうかというに、中国共産党は、モスクワ宣言とモスクワ声明にさだめられた独立、平

等と話しあいで見解を一致させる準則にもとづいて兄弟党、兄弟国のあいだの関係を処理することを一貫して主張してきた。われわれはソ連とアルバニアの関係についても、ずっとこの主張を堅持している。われわれはソ連とアルバニアの関係が改善されることをねんごろに希望し、このために自己の国際主義的な責任をはたしてきた。われわれはたびたびソ連の同志に勧告して、ソ連とアルバニア関係改善の面では、大きな党、大きな国がイニシアチブをとるべきであり、内部の平等な話し合いをつうじて意見の相違をとりのぞくべきである、たとえ一部の意見の相違がいちい解決できないにしても、辛抱よく待つべきであつて、関係をいつそう悪化させるおそれのあるいかなる措置もとるべきでない、と云つてきた。中国共産党中央はこのため、ソ連共産党中央に書簡をおくり、話し合いの途をつうじてソ連・アルバニア関係の問題を解決するよう希望した。

だが、われわれのこうした、誠意ある努力も重視されなかつた。ウロラ海軍基地から艦隊を撤退させ、アルバニアから専門家を引きあげ、アルバニアへの援助を停止し、アルバニアの内政に干渉するなど、一連の事件が発生した。

無法にも兄弟国の関係についての準則にそむくこのような行為にたいしては、中国共産党は痛心にたえなかつた。中国共産党の指導者は、ソ連共産党第二十二回大会の直前、またしてもソ連

の同志にたいし、ソ連・アルバニア関係を改善するようにとの同志的な忠告をおこなつた。ところが、われわれの思いもよらなかつたことには、ソ連共産党第二十二回大会の席上、公然と名を挙げてアルバニア労働党を攻撃するという重大事件がおこり、ある兄弟党の大会の席上で公然と他の兄弟党を攻撃する悪らつな先例がつくられた。この大会に参加した中国共産党代表団は、モスクワ宣言とモスクワ声明の兄弟党の関係についての準則をまもるため、また共同して敵にあたる利益のため、ただ味方を痛心させ敵に快哉をさげさせるのみであるこうしたやり方には賛成できないことをはっきりと表明した。

残念なのは、われわれのこのような厳正な態度が非難をあびるにいたつたことである。ある同志は、△もし中国の同志たちがアルバニア労働党と各兄弟党の關係の正常化に努力したいと思うなら、中国共産党以上にこの問題の解決を促進できるものはいないだろう」とまでも言つていく。このことばはいつたどういう意味なのか？もし中国の同志はソ連・アルバニア關係の悪化に責任をおうべきだといふのなら、それは故意に責任を回避し、あやまちを人になすりつけるものである。また、もし中国の同志にソ連・アルバニア關係の改善を促進してほしいとのぞむのなら、われわれは指摘したい、それらの同志はわれわれのたびかきなる勧告をまったくかえりみず、あくまでもソ連とアルバニアの關係を悪化させようとし、さらにアルバニアの党と国家の指

導者をいれかえることまでも公然とよびかけているではないか、これは実際には、他の兄弟党がソ連・アルバニア関係改善のため効果的な努力をほらう可能性をうばいさるものにはかならない。この大会のあと、これらの同志は無法にもソ連と社会主義兄弟国アルバニアとの外交関係を断絶した。このことは、彼らにソ連・アルバニア関係の改善をのぞむ気持ちがまったくないことを有力に立証するものではないだろうか？

トレーズらの同志は、中国の新聞が「アルバニアの指導者のまちがった論点をまきちらしている」と非難している。だが、指摘しておかねばならないのは、中国共産党がわれわれの内部の意見の相違を表面化することに一貫して反対しているのたいし、ある兄弟党の同志は意見の相違を表面化することをあくまでも主張し、こうしなければマルクス・レーニン主義の立場に合致しないと考えていることである。ソ連とアルバニアの意見の相違がすでに表面化した状況のもとで、われわれは論争している双方のがわの一部の資料を同時に発表し、中国人民が事態の真相を了解できるようにした。いつたい、ある兄弟党の同志は再三再四にわたって勝手にままた他の兄弟党を非難してもよく、この兄弟党の指導部がレーニン主義に反対しているとか、帝国主義から銀貨三〇枚のほどこしをうける権利をえようとしているとか、あるいは両手を血まみれにした死刑執行人だとか言つても一向さしつかえないのに、この兄弟党が自分のために弁護することを許

さず、他の兄弟党が論争の双方のがわの関係資料を同時に発表することも許さないという、いつたい、こんなふうに考えることができるのだろうか？ **自分が「まったく正しい」ときめこんでいる人間はアルバニアを攻撃する文章をつぎつぎに発表したが、さてアルバニアの同志が彼らに回答をあたえた文章については、すっかりふるえあがつてしまつて、みづからそれを発表する勇氣がなく、他の人がそれを発表するのをおおそれている。このことは彼らの無理無体なことをみずからさらけだしたものにほかならない。**

トレーズらの同志はまた、中国共産党が「共産主義者のあいだに存在または出現する可能性がある意見の相違を大衆運動のなかへもちこんだ」と非難し、わけても一九六一年十二月にひらかれた世界平和評議会ストックホルム会議で「民族解放闘争を軍縮と平和のための闘争に対立させたい」といつている。

だが、事実はこちらとまったく正反対である。兄弟党のあいだの意見の相違を国際民主組織のなかへ拡大したのは、中国の同志ではなくて、ある兄弟党の同志である。彼らはしばしばモスクワ宣言、モスクワ声明と対立する自己のまちがった路線を国際民主組織におしつけようとしている。彼らは民族解放闘争を世界平和をめざす闘争に対立させ、これらの国際民主組織に代表される広はんの大衆の、帝国主義と植民地主義に反対し、民族独立をかちとり、これをまもる広はん

な要求を無視して、「すべては軍縮のために」ということをあくまでも至上の任務とするとも、帝國主義と搾取制度がなお存在する条件のもとでも、「兵器もなく、軍隊もなく、戦争もない世界」を実現できるというまちがった思想をさかんに売りさばっている。こうした組織のなかに、たえずはげしい論争がもたらがったのはこのためである。おなじような論争は一九六一年十二月にひらかれた世界平和評議会ストックホルム会議にもあらわれた。この会議の席上、あるものは「帝國主義と植民地主義の銃剣のもとに生活している植民地・半植民地の人民にたいし、帝國主義者と植民地主義者が全面的かつ完全な軍縮をうけいれるのを待て、彼らが民族独立運動の弾圧に武力の使用を放棄するのを待て、彼らが軍縮でうかせた金を低開発国の援助にまわすのを待てと要求した。これらの人びとは、実際には、こうしたすべてのことが実現するまで、すべての被抑圧民族が帝國主義と植民地主義に反対する闘争をおこなわず、植民地支配者の武力弾圧に反抗しないことを要求しているのであつて、そうでなければ、世界大戦をひきおこし、いく億の人びとの死をまねくことになるのである。ほかでもなくこうしたでたらめな「理論」にもとづいて、彼らはあるうことが民族独立運動を「死骸運動」と罵つたのである。中国の同志ではなくて、まさしくこれらの人びとこそモスクワ宣言とモスクワ声明にそむいたのである。

カリブ海の危機と中印辺境の衝突は、さいきんの国際情勢における二つの大きなできごとである。中国共産党がこの二つのできごとなかでとっている立場は、完全にマルクス・レーニン主義に合致し、完全にモスクワ宣言とモスクワ声明に合致している。ところが、トレーズらの同志は中国共産党に悪どい攻撃をくわえているのである。

カリブ海の危機の問題では、トレーズらの同志は、中国が「ソ米のあいだに戦争をおこさせ、これによつて、世界を熱核戦争の災禍のなかに投げこもう」としていると非難している。事実ははたしてトレーズらの同志のいうとおりであろうか？ カリブ海の危機のなかで、中国人民ははたしてどういうことをしたのだろうか？ 中国人民はアメリカ帝國主義の侵略行為をだんこ糾弾した。

中国人民はキューバ人民の独立と主権をまもる五項目の要求をだんこ支持した。中国人民は、無原則な妥協のために「国際査察」をキューバにおしつけることにだんこ反対した。われわれがこうしたからといって、いったいどのような誤りをおかしたことになるのか？ フランス共産党の一九六二年十月二十三日のコミュニケも、「立ちあがって、アメリカ帝國主義の好戦的な挑発行為に力づくよく反対しよう」とよびかけたのではなかったか？ 同日の「ユマニテ」紙もアメリカが「キューバにたいしてかねてから準備してきた露骨な侵略」を非難し、各国人民に「彼らがキューバとの団結をつよめ、彼らの闘争をつよめる」ことをよびかけたのではなかったか？ トレーズらの同志にたずねたい、諸君がこのようにキューバ人民を支持し、アメリカの侵略に反

対したのは、これまた、世界を熱核戦争の災禍のなかへ投げこもうとしているのか？ 諸君が以前にこうしたのは正しかったのになし、中国がこれを堅持しているのは罪をおかしたことになるという、これはいつたいどういうわけであるか？ はっきりいえば、諸君が指揮棒にふりまわされて、その後とつぜん立場をかえ、アメリカの侵略行為にたいしては「理性的な譲歩」、「賢明な妥協」をおこなう必要があるときかんにわめきたてたからである。だからこそ、諸君は銃口をぐるりと回転させて、闘争のほこ先をアメリカの強盗から正しい立場を堅持する兄弟党へと向けかえてしまったのである。

いつそう悪らつなのは、フランス共産党の一部の同志があらうことか、アメリカ侵略者にだんこ反対しているすべての人びとを中傷して、「革命的な語句の英雄」であると罵り、「空談義をしている」とか、「各国人民が正當にもキューバ人の勇氣にたいしていただいている敬服の念に投機している」とかといっていることである。フランス共産党の一部の同志はまた、「水爆にたいしては、勇氣だけではたりない」とか、「キューバ人の胸を犠牲として革命的な語句の祭壇にささげるな」とかいつている。これはいつたいなんということばであるか？ いったいだれを非難しているのであるか？ もし英雄的なキューバ人民を非難しているのであれば、まったくもって恥しらすなことである。また、もしアメリカの強盗に反対して、キューバを支持している中

国人民と各国人民を非難しているのであれば、諸君じしんが、キューバ人民を支持しているなどというのはまったくの欺瞞であることをさらけ出したものではないか？ トレーズ同志やフランス共産党の一部の同志から見れば、水爆をもたない人がキューバを支持するのはみな「空談義をし」、「投機をしている」のであり、水爆をもたないキューバ人民は水爆をもつ国に屈服し、国家の主権をうりわたし、「国際査察」をうけいれ、アメリカ帝国主義の侵略の祭壇にささげられるはかばかしくないことになる。これは徹底した強権政治論であり、徹底した核兵器拝物教であつて、共産主義者の口にすべきことばでは断じてない。

われわれはトレーズらの同志につげたい。全世界人民の目はくもっていない、カリブ海の危機をめぐる問題で誤りをおかしたのは、われわれではなくて、諸君である。なぜなら、諸君はカリブ海の危機をひきおこしたケネディ政府をすくいだして、ケネディ政府さえ否定している、アメリカのキューバ不侵入の保証なるものをむりやりに人びとに信じこませようとしているからである、また、諸君は冒險主義の誤りも投降主義の誤りもおかしている同志のために弁護し、ある兄弟国の主権をおかした行為のために弁護しているからである、そしてまた、諸君はアメリカ帝国主義に反対することを第一とするのではなく、中国共産党その他のマルクス・レーニン主義政党に反対することを第一としているからである。

中印境界問題では、トレーズらの同志は、中国が中印境界の紛争解決について、「最少の誠意」にもかけているとのべている。こうした非難はでたらめである。

中印境界問題を平和裏に解決しようとする中国政府の一貫した立場と多年来の努力については、われわれはすでにたびたび述べてきた。当面の中印辺境の情勢は、インド軍のおこした大規模な攻撃が重大な敗北をこうむったことと、中国軍が自衛の反撃に勝利してのちみずからすすんで停戦し、みずからすすんで後退したことによって、すでにやわらぎはじめている。ここ三年あまりのあいだ、中印境界の紛争の過程が有力に立証しているとおり、中国政府がインドのネール政府の反動政策にたいして必要な闘争をおこなったことはまったく正しかったのである。

おどろかざるをえないのは、ネール政府が社会主義兄弟国にたいして挑発と攻撃をおこなったとき、マルクス・レーニン主義者と自称する一部のものが、プロレタリア国際主義の原則にそむいて、いわゆる「中立」の立場をとり、実際には、政治上ネール政府の反中国政策を支持したばかりでなく、軍事物質をもネール政府に供給しているということである。トレーズらの同志はこうしたまぢがったやり方を非難しないばかりか、逆にこれを「聰明な政策」といつている。諸君のマルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義はいつたいどこへなげすてられてしまったのか？

トレーズ同志は一再ならず、中国の対インド政策は帝国主義に有利であると非難している。彼ははやくも一九六〇年、中国共産党のおかげで「アイゼンハワーはインドで、他の状況のもとではえられなかつたような歓迎をうける機会をえた」とのべた。いまなお、フランス共産党の一部の同志はたえずこうした非難をくりかえしている。

ここで、われわれは多くをかたる必要はない、すこしでも政治的な眼光のある人ならすぐわかるように、ネール政府が中印辺境の衝突をひきおこしたねらいのひとつは、アメリカ帝国主義の必要に応じ、アメリカからより多くの援助をもらうことにあつた。われわれはただトレーズ同志やフランス共産党の一部の同志に注意をうながしたい、諸君は、当時アイゼンハワーがインドで歓迎をうけたばかりでなく、フランスでも熱烈な歓迎をうけたことをわすれさつたとも言うのであろうか？ 一九五九年九月、アイゼンハワーがパリを訪問したとき、パリ地区のフランス共産党の一部の市議員と県議員がアイゼンハワーを歓迎するレセプションに出席しなかつたため、トレーズ同志はフランス共産党中央委員会総会の席できびしい批判をおこなつた。彼はこうのべている。「われわれは、政治局がパリ地区の市議員と県議員の出席を要求する決定をおこなつたにもかかわらず、市庁でおこなわれたアイゼンハワー歓迎レセプションには全員の出席がみられなかつたことを一つの誤りであると考へている。これは一つの誤つた態度である。わた

しはかえつてくると(当時トレーズ同志は外国からかえってきたばかりであった―編集者)、すぐ批判をおこなったが、もう一度くりかえしていつておきたい。政治局は正しい決定をおこなったが、その遂行を保証しなかつたのである」と。(一九五九年十一月十一日の『ユマニテ』紙より)トレーズ同志にたずねたい。もしネールがアイゼンハワーを歓迎したのは中国共産党の誤りによるものであったとするなら、トレーズ同志がパリ地区のフランス共産党の全市会議員と県会議員にアイゼンハワーを歓迎に行くよう要求したのはいつたれの誤りによるものであったのか? マルクス主義の階級的観点から見れば、アイゼンハワーがネールの歓迎をうけたのはいささかもおどろくにあたらない、だが、共産党の指導者ともあろうものがアメリカ帝国主義の頭目を歓迎することにかくも熱中し、歓迎にいかなかつた同志をかくもきびしく批判するとは、まったくおどろかないわけにはいかないのである。

カリブ海の危機と中印境界の問題では、「まったく正しい」と自称する一部のものものとして、る路線と政策はマルクス・レーニン主義にそむき、モスクワ宣言とモスクワ声明にそむくものであるということがまたしても大いにさらけだされた。だが、彼らはやはり、そのなかからしかるべき教訓をくみとり、前非をくいあらため、マルクス・レーニン主義の軌道にもどり、モスクワ宣言とモスクワ声明の軌道にもどるといふことをしていない。逆に、彼らは恥ずかしさのあまり

ますますいきりたち、まちがった道をますます遠くまで歩みきつていっている。彼らは、中国共産党その他の兄弟党に反対し、国際共産主義運動の団結を破壊するいつそう大規模な逆流をまきおこして、人びとの視線をそらせ、自分のまちがいをおおいかくそうとしているのである。

一九六二年十一月から一九六三年一月まで、ヨーロッパのいくつかの兄弟党がい前後して大会をひらいた。これらの大会では、ねりにねつた計画によつて大がかりに、系統的に、公然と名ざして中国共産党その他の兄弟党を攻撃するという俗悪な事態がもちあがつた。わけでも最近ひらかれたドイツ社会主義統一党大会では、中国共産党その他の兄弟党を攻撃し、国際共産主義運動の団結を破壊するこうした逆流が新たな高潮にたつした。この大会では、一部の同志は一方では攻撃をやめようといひながら、いま一方ではひきつづき中国共産党その他の共産党に無法な攻撃をくわえ、公然とチトー一味の名譽回復をおこなった。これらの同志のとつて、こうした二面的な手口で人をあざむくことができるだろうか? できないのはあきらかである。こうした二面的な手口は、彼らが論争をやめ、団結をとりもどすことに決してまごころからの誠意をもつものでないことをしめすものと思われぬ。

とくに指摘しておかなければならないのは、チトー一味にどう対処するかという問題が重大な原則問題だということである。この問題は、モスクワ声明をどう解釈するかという問題ではな

く、モスクワ声明をまもるか、それともほごにするかという問題である。またある兄弟党にたいしてどのような態度をとるべきかという問題ではなく、共産主義事業の叛徒にたいしてどのような態度をとるべきかという問題である。さらにまた、誤りをおかした同志をどのように援助して誤りをあらためさせるかという問題ではなく、マルクス・レーニン主義の敵を暴露し、批判するという問題である。中国共産党はマルクス・レーニン主義とモスクワ声明に忠実であって、各国兄弟党の共同のとりきめを勝手きままに骨ぬきにしたり、ほごにしたりするのを断じてゆるさず、叛徒をわれわれの隊伍のなかにひきいれるのを断じてゆるさない、また、マルクス・レーニン主義の原則をとりひきすることに断じて同意できず、国際共産主義運動の利益をとりひきすることに断じて同意できない。

以上にのべたさまざまな事実から、はつきりとつぎのことがわかる。一連の問題についてモスクワ宣言とモスクワ声明にたいしますます重大な違反をしているのは、われわれではなくて、一部の兄弟党の同志である。この二つの共同の文書にもとづいて兄弟党間の意見の相違をとりぞくのではなく、逆にこの意見の相違を激化させているのは、われわれではなくて一部の兄弟党の同志である。兄弟党間の意見の相違をさらに公然と敵のまえにさらけだし、兄弟党にたいしていよいよ無法にも公然と名ざして攻撃をくわえているのは、われわれではなくて一部の兄弟党の同志

である。自分のまちがった路線を国際共産主義運動の共同の路線に対立させ、社会主義陣営と国際共産主義運動にますます重大な分裂の危険をこうむらせているのは、われわれではなくて一部の兄弟党の同志である。

以上にのべたさまざまな事実から、また、はつきりとつぎのことがわかる。トレーズやフランス共産党の一部の同志は当面の国際共産主義運動の厳肅な討論にたいしておそろしく無責任な態度をとっている。彼らは欺瞞的な手段をとり、封鎖政策をおしすすめ、真相をおおいかくし、中国共産党の観点をまげて、だれははかるところなく中国共産党を攻撃している。これは、討論をおこなう正しいやりかたでもなければ、フランス共産党の党员とフランスの労働者階級にたいして責任のある態度でもない。トレーズらの同志は、もし事実にたちむかう勇氣があり、自分が正しいと信じるのなら、われわれのさいきん発表した関係論文をもふくめて、中国共産党が自己の観点をあきらかにした資料を公表し、フランス共産党の全党員とフランスの労働者階級に真相を知らせ、彼らに自分じしんで是非を判断させるべきである。トレーズらの同志よ、われわれは、諸君がわれわれを攻撃した言論をすでに公表した。諸君もこうすることができるかどうか？ 諸君はこのような政治家の風格があるかどうか？ 諸君はこうするだけの度量があるかどうか？

トレーズ同志やフランス共産党の一部の同志がどれほどまでに事実をまげ、是非を転倒させて

いるかは、たしかに人びとを驚かすに十分なものがある。ところが、彼らじしんは一貫して「創造的なマルクス・レーニン主義者」などと自称している。それなら結構である、ひとつ、この「創造的な」ものを見てみようではないか。

われわれの知るところでは、一九五九年以前、トレーズらの同志はアメリカ帝国主義が侵略勢力の頭目であると正しく指摘し、アメリカ政府の侵略政策と戦争政策を正しく非難したことがある。ところが、キャンブ・デービッド会談の直前、ある人が、アイゼンハワーは「国と国の関係の緊張した情勢をとりのぞき」たいという希望をもっているというところ、トレーズらの同志も先をあらそってアイゼンハワーに喝采をおくり、フランス共産党の議員がこの「平和の使者」の歓迎に行くことを決定した。これは指揮棒にしたがつて百八十度の大転換をしたのである。

また、われわれの知るところでは、一九五九年九月、ドゴールがアルジェリアの独立と主権を頭から否認するいわゆる「自決」の声明を発表したのち、フランス共産党中央委員会政治局は声明を発表して、これは「まったく欺瞞的な陰謀」であると正しく指摘したことがある。当時、トレーズ同志じしんも、これは「政治的な駆けひきにすぎない」といつていた。ところが、ひと月あまりたつて、ある外国の同志がドゴールの声明は「重要な役割」をもっているというところ、トレーズ同志もすぐフランス共産党中央委員会政治局が「まちがった評価をした」ときびしく批判

し、もとの声明は「あまりにもあせりすぎ、せつちかちすぎる」といつた。これもまた、指揮棒にしたがつて百八十度の大転換をしたのである。

また、われわれの知るところでは、かつてトレーズらの同志はユーゴスラビアのチトー一味の修正主義的綱領を正しく糾弾し、チトー一味は「アメリカ資本家から手当をもらっている」、これらの「資本家が彼らに手当をあたえるのは、あきらかに社会主義建設をうながすためではない」とのべていた。ところが、さいきん、ある人が、チトー一味に「援助」をあたえて「すべての兄弟党の大家庭のなかにしかるべき地位をえさせる」べきだというと、トレーズらの同志も「ユーゴスラビア共産主義者同盟がふたたび共産主義の大家庭にもどってくるように援助する」とまくしたてている。これもまた、指揮棒にしたがつて百八十度の大転換をしたのである。

また、われわれの知るところでは、一年あまりまえ、中国共産党がある党の大会で公然と他の兄弟党を攻撃することに反対したとき、ある人がわれわれのこうした立場を非難して、これは「非マルクス・レーニン主義的な立場」だいつた。すると、トレーズ同志も鬨がえしに、中国の同志がこうした態度をとるのは「道理がとおらない」し、「正しくない」といつた。また、さいきん、ある人が一方では公然たる論争をやめようといいいながら、他方ではひきつづき攻撃をおこなうようになると、フランス共産党の一部の同志もそれにならい、これこそ「賢明な、

レーニン主義的な」やりかただといっている。これもまた指揮棒にふりまわされているのである。似かよった例は枚挙にいとまがない。このように、無条件に指揮棒にふりまわされるのは、封建的な家父長制のきわめて正常でない関係であつて、兄弟党のあいだにあるべき独立・平等な正常の関係であるとは絶対にみとめられない。見うけるところ、一部の同志たちは、自国のプロレタリアートと自国の人民の利益をまったく無視してよく、また国際プロレタリアートと世界人民の利益をまったく無視してもよく、ただ他人の尻にくつついていけばそれでいいのだと考えているらしい。いったいぜんたい東にむかえばいいのか、西にむかえばいいのか、前むきがいいのか、うしろむきがいいのか、こんなことはみなまるつきり問題にせず、ただ人の口まねをし、人の尻にくつついてゆけばいいというのである。ここに多いのは鸚鵡がえしの技術であつて、すくないのはマルクス・レーニン主義の原則性である。こうした「創造的なマルクス・レーニン主義者」には、いつたいほこるべきどのようなものがあるだろうか？

トレーズ同志やフランス共産党の一部の同志が中国共産党にくわえている悪どい攻撃と誹謗は、いかに長つたらしくいんどくしたものであつても、偉大な中国共産党の光栄をすこしもそこなうことはできない。彼らのこうしたやりかたは、各国の共産主義者が意見の相違をとりのぞき、団結をつよめようとしているこの願いにそむくものであり、フランスの労働者階級とフラン

ス共産党の光栄ある伝統に合致しないものである。

フランスの労働者階級と勤労人民は、年ひさしい光栄ある革命的伝統をもつてい。フランスの労働者階級はパリ・コンミュンの英雄的なところみによつて、全世界各国のプロレタリアートにかがやかしい手本をしめた。フランス労働者階級のすぐれた戦士と天才的な歌手によつてつくられたプロレタリアートの不朽の戦歌「インターナショナル」は、全世界人民をばげまして解放をかちとり、あくまでも革命をやりぬかせる音色もさわやかな進軍ラップである。偉大な十月社会主義革命の影響のもとにうちたてられたフランス共産党は、フランス人民のなかの多くのすぐれた男女を集めており、彼らはフランスの労働者階級および勤労人民とともにねばりつよい闘争をすすめてきた。ファッシズムにたいする抵抗運動では、フランス人民はフランス共産党の指導のもとに、フランス労働者階級の革命的な伝統を発揚し、なにもものもおそれない英雄的な気概をしめた。戦後も、世界平和をまもり、民主主義的権利をまもり、勤労人民の生活条件を改善し、独占資本に反対する闘争のなかで、フランスの共産主義者は大きな役割をはたしている。中国共産党と中国人民は、ゆらい、フランス共産党とフランス労働者階級にたいしてきわめて大きな尊敬の念をいだいている。

トレーズらの同志は、中国の同志が誤りをあらためるべきだと一再ならず強調している。だ

が、真に誤りをあらためる必要があるのは、われわれではなくてトレーズらの同志である。われわれはこの文章でトレーズ同志やフランス共産党の一部の同志を相手に討論せざるをえなかったが、われわれはやはり、彼らがフランス共産党の歴史を尊重し、共産主義事業のために奮闘する自己の歴史をたいせつにするよう、まごころから望んでいる。われわれは、彼らが国際共産主義運動の根本利益に重きをおいて、フランスのプロレタリアートの革命的伝統とあいられない誤りをあらため、フランス共産党の光栄ある伝統とあいられない誤りをあらため、共産主義事業に献身するという自己の誓いとあいられない誤りをあらため、マルクス・レーニン主義の旗のもとにかえり、モスクワ宣言とモスクワ声明の革命的原則にかえることを期待している。

中国共産党は終始一貫して社会主義陣営の団結、国際共産主義運動の団結、世界各国の革命的人民の団結を堅持し、この団結をそこないかなる言論や行動にも反対している。われわれは終始一貫してマルクス・レーニン主義を堅持し、モスクワ宣言とモスクワ声明の革命的原則を堅持し、この革命的原則にそむくいかなる言論と行動にも反対している。

国際共産主義運動のなかになれこれの意見の相違が生じるのは、もともとさげがたいことである。意見の相違が生じたばあい、わけても国際共産主義運動の路線にかかわる意見の相違が生じたばあいは、なほ団結の願望から出発し、厳粛な討論をつうじて、マルクス・レーニン主義の

基礎のうえに立ち、意見の相違をとりのぞくときにはじめて、国際共産主義運動の団結をつよめることができる。問題は、討論をおこなうかどうかにあるのではなく、どのような経路と方法によつて討論をおこなうかにあるのである。われわれは一貫して、各兄弟党の内部で討論すべきであり、公然と討論すべきではないと主張してきた。われわれのこうした主張は非難の余地もないのだが、それにもかかわらず一部の兄弟党の同志の攻撃をうけている。いま、これらの同志はわれわれとその他の兄弟党にたいして一年あまりも公然たる攻撃をおこなったのち、口ぶりをかえて公然たる討論をやめようといっている。われわれはたずねたい。いま、諸君は、諸君がこれまで公然と兄弟党を攻撃したことを誤りだと考えているのかどうか？ 諸君は、こうした誤りをみとめて、諸君の攻撃した兄弟党にわびる用意があるのかどうか？ 諸君はまごころから内部の平等な話しあいの軌道にもどる用意があるのかどうか？

意見の相違をとりのぞき、団結をつよめるために、中国共産党は、各国共産党・労働者党代表者会議の開催をこれまでたびたび提案してきたし、いままもなお主張しており、すべての兄弟党とともに必要な段どりをおつて、兄弟党の会議をひらくために条件をととのえたいと思つてゐる。

兄弟党の会議を準備する一つの段どりとなるものは、いまなおひきつづきおこなわれている公

然たる論争をやめることである。これは、中国共産党がはやくからとなえてきた主張である。われわれはこう考えている、公然たる論争の停止ということは言行が一致すべきものであり、たがいにおこなうべきものであり、全面的なものでなければならぬ。ある人は、一方では論争をやめようといひながら、いま一方ではひきつづき攻撃をおこなっている。実際には彼らは、他人をなぐつたのち、他人がなぐりかえすのを許さないのである。これはできない相談である。中国共産党にたいする攻撃をやめるばかりでなく、アルバニア労働党やその他の兄弟党にたいする攻撃もやめるべきである。同時に、論争の停止に名を借りて、ユーゴスラビア修正主義の暴露と批判を許さないのは、ユーゴスラビア修正主義者の指導者を今後とも暴露するというモスクワ声明の定めた任務にそむくものであり、したがって、絶対に許されないものである。いま、ある人は兄弟であるアルバニア労働党を国際共産主義運動のそとへ排除する一方、叛徒であるチトー一味をこのなかへひきいれようとしている。われわれは率直に彼らにつげたい、それは絶対にできない相談である、と。

二つあるいはそれ以上の兄弟党のあいだの会談をおこなうことは、兄弟党の会談を準備するうえでの必要な段どりである。これは、中国共産党が十ヶ月もまえからとなえてきた主張である。われわれは一貫して、同じ願いをもつあらゆる兄弟党とのあいだに、意見の相違をとりのぞき、

団結をつよめることを目的とする会談をおこないたいと考えている。じじつ、われわれは多くの兄弟党とのあいだにこのような会談をおこなってきた。われわれは、いかなる兄弟党とのあいだにも両党間の会談をこぼんだことは一度もない。イギリス共産党執行委員会の一月十二日の声明は、中国共産党がソ連共産党の「共同討論をおこなおう」という要求をうけいれなかったといっている。これはある党が彼らにそう言ったのださうである。だが、われわれは、これがまったく根も葉もないデッチあげであることをねんごろに指摘しておかなければならない。われわれはかさねてあきらかにしておきたい、われわれはいかなるひとつの兄弟党、あるいはそれ以上の兄弟党とのあいだにも会談をおこない、意見を交換して、各国共産党代表者会議の開催をうながす用意がある。

げんざい、帝国主義、わけてもアメリカ帝国主義は、その侵略政策と戦争政策の遂行に拍車をかけ、狂気のように共産党と社会主義陣営に反対し、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの民族解放運動と各国人民の革命闘争に狂暴な弾圧をくわえている。こうしたとき、われわれの共同の敵に反対するために、各国の共産党、全世界のプロレタリアート、全世界の人民はみな、社会主義陣営の団結をつよめ、国際共産主義の陣列の団結をつよめ、全世界人民の団結をつよめるのを切実に要求している。われわれは、マルクス・レーニン主義の基礎のうえに立ち、モスクワ宣

言とモスクワ声明の基礎のうえに立つて意見の相違をとりのぞき、団結をつよめようではないか！ われわれは、帝国主義反対の闘争をつよめ、世界平和、民族解放、民主主義、社会主義の事業の勝利をうながし、共産主義の偉大な目標を実現するためにともに奮闘しようではないか！

意見の相違はどこからくるか

——トレーズらの同志に答える——

1963年3月 初版発行

定価 10 円

出版者 外 文 出 版 社

中華人民共和國
北京阜成門外百万莊

編号：(日) 3050-542

3-J-551P
00031

63.3.31

・新刊書・

北京 外文出版社

▲ 万国のプロレタリアは団結して われわれの共同の敵に反対しよう

(日本語、英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、ロシア語、ベトナム語、アラビア語、タイ語、エスペラント)

▲ トリアツチ同志と われわれとの意見の相違

(日本語、英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、ロシア語、ベトナム語、アラビア語、タイ語、エスペラント)

▲ レーニン主義と現代修正主義

(日本語、英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、ロシア語、ベトナム語、アラビア語、タイ語、エスペラント)

▲ モスクワ宣言とモスクワ声明の 基礎の上に団結しよう

(日本語、英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、ロシア語、ベトナム語、エスペラント、アラビア語、ヒンディー語、タイ語)

▲ 意見の相違はどこからくるか

——トレーズらの同志に答える——

(日本語、英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、ロシア語、ベトナム語、ヒンディー語、アラビア語、タイ語、イタリア語、エスペラント)

発行者 中国北京 399 号信箱国際書店